リリカルなのは転生者
～身を削っても運命を変えようとする者

N、T

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気がつくと暗い謎の空間に投げ出されていた。もう少しで結婚式を控えていた割と普通の社会人、趣味はラノベやアニメやゲームのややオタク。そして目の前に現れた神に事実を伝えられ、転生させてもらえるらしいので好きだったアニメの世界へ願い出た。そのアニメの人物達の不幸を出来うる限り、取り除けるように才能系のチートの能力を貰って頑張る物語……が動き出す。

目次

無印前
転生者の願い ―― 1
始まりは落とし穴 ―― 6
最初の一歩 ―― 11
運命は何かの弾みで加速する ―― 15
来るべきに日に向かってやるべき事を ―― 22
前世の記憶を夢に見る ―― 27
幼年期の修行 ―― 31
幼年期の不思議体験？ ―― 39
無印開始
無印主人公設定 ―― 45
ユーノ君登場運命は動き出す ―― 47
ユーノ君と魔法のお話 ―― 59
今後の動きは仲良く相談？ ―― 65

無印前
転生者の願い

暗い闇の中……不思議な空間の中少しづつ意識が覚醒し始める。
「ここはどこだろう……まさか……死んだのだろうか……」
どうしてこんなところにいるのか分からなくても、状況整理のためにも色々思い出しながら考えないといけない。
（確か、俺は……そうだ、仕事中に、高圧電流に感電した。名前は……そうだ……御剣紀祐（みつるぎのりまさ）だ。趣味は、アニメとラノベとゲーム（主にＲＰＧやＭＭＯＲＰＧなど）年は２２だ。婚約者もいたのに……人生が終わってしまったのか……）
俺はここに来る前の事を思い出し、肩をがくりと落とし落ち込む。しかし落ち込んでいても状況はかわらないと考え直し、無理やり気持ちを切り替えた。しばらくすると、眩しい光で、空間が満たされる。綺麗な女の人の声が聞こえる。
「冷静なんですね、混乱してるかと思いましたけど……」
こんな空間に急に光が満たされて、声が聞こえるとは……まさか神様の類か？
「考えてるとおり、女神です。貴方は感電で死にました。現実ではですが……そして、本

来なら、あなたは死ななかったのですよ……」
　正に神様だと証明しようと言わんばかりに、考えを読まれ、さらにとんでもないことを言われた。本来ならば、‘死ななかった’と女神は言ったからだ。だが、今怒った所で何も変化がないのは事実だ、冷静に対応しよう。
「ということは、よくラノベなどで使われる……何らかのミスの類ですか？」
　俺がそう問いかけると、女神は申し訳なさそうに答え始める。
「そうなのですよ……ごめんなさい。私のミスのせいなのですが……貴方の生きてる証拠のような物をその……言いにくいのですが……」
　本当に申し訳なさそうに女神は話すので俺もなんだか申し訳なく思い始めたので。
「無理にその辺は話さなくていいですよ。過ぎたことですし」
　正直すぎた事だと思うので俺は素直にそう言った。すると女神はその言葉を聞いて黙り込む。そして光の粒子のような物が俺の目の前に集まり始め、人の形になって女の人が現れた、綺麗な銀色の長髪、紅と蒼のオッドアイ、綺麗とも可愛いとも取れる顔立ち、体系もトータルバランスが美しくある意味完璧の女性が白いワンピースを着て現れた。少し恥ずかしいのか申し訳ない気持ちなのかが判断つかないがモジモジしながら再び話し始める
「そして、おそらく想像できるでしょうけど……。元の世界に戻ることはできません

……。転生で、別の世界へならできるだけ望みどおりに送ることはできますが……」
　出来るだけ望み通りの形で転生が出来ると女神は言った。死ぬ前のような世界ならそのようなものはなくても問題はないけど、行ける世界に合わせて考えないといけないな。
「今行ける世界。というより、私の管轄範囲ではゲームの世界かアニメの世界。アニメに関して言えばなのはで、ゲームだとあなたがハマっていたような感じのです。どちらに行きますか？」
　それを聞いて俺は直ぐに行きたい世界は決まった。転生というイレギュラーが混じるということおとでいくつが疑問が浮かんだのでその中でもとくに気になることも聞くために行きたい世界へのことを伝えるのと疑問を尋ねるために話始めた。
「では、なのはの世界へ。でも他の転生者や、本来存在しなかった人などもいる、パラレルな世界ってことになるのですか？」
　そう尋ねると、女神は直ぐに答え始める。
「そのとおりです。なので、原作どおりなところと、そうでないところもあります。そして当然なことなのですが、その世界で死ねば普通に死んでしまいますのでお気をつけ下さい。行動は慎重にです。ではどういう能力で行きますか？」
　女神にそう聞かれて俺は考え始める、どうせなら原作キャラの不幸を出来うる限り取

り除けるだけの力を、イレギュラーから守るための力を求めよう。そして自分でも反則ではあるけれど、修練しなければ扱えないように、自分なりに制約をつけることで本当に自分の力として振るえるように考えた物を俺は女神に伝えるべく口を開き始めた。

「性別と見た目は今のままで、といっても最終的にって奴ですが。時間軸は、無印開始前で同年代でお願いします。魔力は最終的にＥＸに。初期はＢ―くらいで、後デバイスも最初から一つお願いします。後は自分がハマっていたものを、女神様は知っているようなので、デバイスの形はお任せしますが……ＡＩは女性型でよろしくお願いします。スタイル的には剣士系で、オールラウンダー、マルチウェポン、レアスキルは特殊召還系、空間転移系、魔力変換闇っぽいの以外全種、回復魔法、それと、気孔（きこう）や発勁（はっけい）等も使いたいので……それと一度食らった技や魔法や教わった技や魔法は、修練で習得可能しやすい特性もお願いします」

そう伝えると女神は腕を組み、顎に手を置いて微笑みながら口を開いて話し始める。

「予想通りというか、晩成型チートですねぇ……ゲームでも鍛えて強者でしたものねぇ……そう言えば言ってませんけど魔法式はどうします？」

女神に聞かれて、少し俺は考える……最初から関わるのなら術式自体はミッド式のがいいかもしれない。なので俺はミッド式にしようと考え。

「魔方陣は、ミッド式だけど……レアスキルや技能上オリジナルになりそうですけども

ねぇ……後々自作デバイスなどもしたいので、考えます」

そう応えると、女神もこれ以上は何も聞いてこなくなったので必要事項は揃ったようだ。そして少し間を置いて女神は何かを操作し始め、操作しながら話しかけてくる。

「では、リリカルなのはの世界への扉を開きます。向こうで比較的自由に動けるように、細かい設定や金銭面は任せてください。あ……ちょっと間違えちゃった……」

今凄く不安になるようなことを、呟いたのをおれは聞き逃さなかった。そして足元にべたな黒い円、つまり落とし穴が現れた。当然俺はそのまま落下し始める。

「うわぁぁぁぁ～女神様～こ・れ・は・ひ・ど・す・ぎ・ま・せ・ん・か～?」

俺は全力で叫びながら抗議するが、女神はすこしだけ申し訳なさそうに同じように叫んで。

「間違って落とし穴だしちゃったの～ごめんなさい～」

そして女神の声が遠ざかっていった。これが俺のリリカルな世界での物語りの始まりとなる。

始まりは落とし穴

「いてて……．あの女神様微妙にドジだなぁ，とりあえず状況確認をしないと……」

俺は少し警戒しながら周りを見回す、木ばっかりなとこを見ると森や山だろうと推測出来る。水の流れる音がするので、恐らく川が近くを流れているのだろう。そっちのほうに歩きながら自分が着ている衣服を手探りをしてポケットなどを確認してみると、メモと銀のアクセ（クロス）があった。メモは恐らく、女神様からの注意書きなどだろう……ということは、こっちのクロスは、デバイスになるのかな？

俺はそう考えているとクロスが喋った。

《そのとおりですマスター。初めまして、まだお名前も貰っていませんので、概ね状況把握しましたらよろしくお願いします》

ちょっと感動しながらも、今まで色々放置していた事柄を整理すべく考え始める。（とりあえず夢ではない……。これは現実なのだろう、そうなると完全把握してるわけじゃないけど、原作のことは知っているので色々動けないことはない。といっても……とらハに関してはあまり知らないので、異常なようなことはできないのだが……。とりあえず現在の日時把握もしないと、ソレによって修練もしないといけない……とりあえ

ず、メモを先に見ようか……）

『無事にたどり着きましたか？とりあえず、あなたは、海鳴市の森にまず送りました。原作で言えば、一週間後に、なのはちゃんの父、士郎さんが、入院する頃になります。あなたの家の場所は、メモの最後のほうに、地図を書いてます。それと家族は、誰もいませんので、そのつもりで……お金は、転生特権というか、口座に常に一定入るようになっているのと、子供なのに、怪しまれないようになっています。普通に行動できるので、一応保護責任者御剣美樹（みつるぎみき）といっても、私がなっていますが、基本的には、干渉できません。頑張って第二の人生を生きてください』

……。色々突っ込みどころもあるとはいえ、自由に動けるけどもだ、家事全般や買い物などもしなければいけないわけか……。子供だから時間に縛られない、しかし警察などは、普通に捕まるだろうから、完全自由には動けない。まぁ、何とかなるだろう……。そう考えていると、川が見えてきたので、自分の見た目の確認をすることにした。

「……黒髪に少し長い髪に黒目に顔は変化無しで、昔の傷後などが消えていること除けば、概ね希望通りか、服装は白い服に黒の半ズボン。まぁ、このあたりは問題ないか……知識や経験もそのままのようだし、子供らしくすることを意識するか練習しないと、マセガキや老けてるように感じられそうだ……。さて、デバイスに起動法など、チュートリアルくらいは済ませよう……」

　そうして周りを確認し、デバイスをポケットから取りだした。
《マスター考えなどはまとまりましたか？》
「ああ、まとまった。チュートリアル頼む」
《では、まず私の名前の認証からお願いします》
「マスター認証、御剣紀祐。デバイス名称正式名精霊の涙（エレメントティア）、愛称は、ティア他はどうすればいい？」
《とりあえずは、これでＯＫです。現状のマスターの能力ですが……総魔力はＣ＋、潜在魔力はＥＸです。レアスキル名称も、一応考えられるほうがいいのですが……》
「確かにそうだなぁ……割と贅沢言ってあるから……かなり自由度あるしなぁ……自由は、フリーダムだけど、ありきたりだしな……定まらない、自由な形……形がない……無形夢想はどうだろう……自由だし、そもそも言い換えれば、何でも覚えるしなぁ……」
《良いのではないでしょうか？後は、軽く慣らしもかねて、セットアップして見ましょう。》
「わかった、精霊よ、我に力を、エレメントティア、セットアップ！」
《イエスマイマスター》
　そうして、バリアジャケットが展開、腕に白く軽そうなガントレットに、足もおなじ色のグリーブ、白いロングコートに、黒のズボン、頭には白い鉢巻と、右手には、形は

オーソドックスなロングソードだけど、装飾が刻まれてる。
「見事に、趣味どおりだなぁ……手と足はまぁ、こうなるとして、服装は、色変えのエリオに、白い鉢巻って感じになったかなぁ……」
《マスター現状ですが、空間転移は使用不可。ですが、高速機動系、身体強化系、近距離および中距離射撃は、使用可能ではあります。といっても、初歩の初歩なので、すごいものは使えません。結界は、マスターの魔力で、私が発動できるので、軽く練習するなら、今から張りますけど？》
「じゃぁ頼む」
《了解マスター》
　そう言って、結界を展開して武器を構える。
「とりあえず、飛行の練習と、加速になれよう……」
　まずは、ゆっくり飛び上がる、適当に移動して。
「飛んでるだけでも、結構消耗するんだな……長期戦するには、色々特訓しないとだ……とりあえず、高速機動といえば、ソニックムーブのような奴が出るが……ここは自分で考えてみよう……よし決めた、ウイングエア！」
　地面に向かって、急加速で思わず地面に、墜落しそうになった。
「危ない危ない……かなり加速するもんだな……ゆっくりなれて行こう……ティアそう

いえば、変換系は現状どうなってる？」

《変換は火と風が最弱で使えます。》

なるほどな、ゆっくり発現や取得の方が、その力に関しての使い方をより理解できるはずだと考え、とりあえず地面に着地する。剣を収納して魔法をつかって空を飛んだ事に興奮する心を沈めながら。

「ティアＢＪ解除」

そう言って解除してメモに書いてある家の方へ向かうことにした。

最初の一歩

森から海鳴市に向かって歩き、地図のとおりに歩く……かなりの距離があったので所々で休みながら、歩いてかなりの時間を使ったがメモに書いてある自分の家に辿り着いた。そして初めて見るはずの家なのに何故か懐かしさを感じる。

「……う～ん……すごく懐かしいというか……見覚えのある家だなぁ……」

それもそのはず見た感じが、転生前の世界の家そっくりな上に、恐ろしいことに花や外から見える家具までもが、そのままだという……。確かに慣れてるもののほうが居心地もよくていいんだが、少し期待していた気持ちを裏切られたのは言うまでも無い。まぁ住むところを用意してくれてるのなら、文句を言ったら罰が当たるけどな。そう考えているとティアが喋り始める。

《マスター。そう言えば女神さまから伝言が『在しうる範囲で転生前のものを再現。服は子供用にサイズに変化してるので、暫くは衣服に困る事は無いと思います上手く活用してくださいね♪』とのことですよ》

……サービスがいいというか、準備が良いというか……。なんというご都合主義な……、よく見ると鍵まで刺さったままになっている……。これはでも無用心だろう。そ

ういうことを考えつつ女神様に突っ込みも入れて……いざ玄関を開けてみる。
「本当に、恐ろしいくらい、そっくりなのだが……とりあえず冷蔵庫の中を見てみよう……」
中もとりあえずそのままだった。とりあえずこれなら2週間は買い物せずに済みそうだ……。理由は子供ゆえに、一度に大量に食べれないからだ。でも転生前だと四日ほどしか持たない。実は、大喰らいである。とりあえず他の部屋の状態も確認しよう。
「2階へ行くか……」
独り言を呟きながら2回へ上がる。本来なら家族の部屋もあるのだが……それも見た目は再現されていたし、自分の部屋にいたっては、ほぼそのままで、パソコンのデータ以外はそっくりだった。
「ここまでそっくりそのままだと、かなり恐ろしいものがあるな……あの女神様……ストーカーなのでは……」
罰当たりなことを言いつつも心の中では感謝し、とりあえず飯を作ろう考え、ふと思ったことがある。よくよく考えると、椅子とか色々使わないと台所が使えないという事実を思い出したのだ。
「ティア一つ聞いてもいいか？」
《どうしました？マスター？》

「身体強化系で、大人に変身もたしか含まれたっけ？」
《そのとおりですけど……現状だと使用はできませんけど……。さして難しい魔法ではありませんよ？》
「そうか明日からとりあえず、その魔法先に習得しよう。サポート頼むなティア」
《了解マスター》
　とりあえず、1階に下りて台所で適当に材料使って、適当に炒め物作り始める。やはり今の身長ではキッチンを有効的に使うのは無理そうだ。椅子やお立ち台になりそうなものを駆使し悪戦苦闘しつつも何とか調理が終わる。そして手抜きの野菜炒めを食べる……手抜き故にあまり上手くないがこの体ではどうしようもなかった。
「大人モード覚えるまでは、手抜き料理になりそうだ……」
《マスター頑張りましょう。》
　そうティアに励まされて、二日ほど術式の勉強をする、理数系は生前でも割と得意だったのでさして苦労せずに基本的な理論は習得し、後はそれを実際に行使して維持する練習に時間を費やし、かなり苦労しながらも大人モードも習得した。とはいっても、これは戦闘で維持しながら使えるものには届かなかったけども。総魔力が低く、消耗していく魔力の都合である。
《マスターそろそろ動かないのですか？翠屋とかに行ってみるとか？》

ティアに聞かれ、俺は少し考えてから答える。実際行きたいところは色々あるけれど、今は生活に慣れるのと自身の体の強化をしないといけない。

「確かにファンとしてみれば。翠屋のお菓子は、ものすごく惹かれるんだよなぁ……まぁ、それはなのはに会ってからかなぁ……さて、体力トレーニングも始めよう。まだ、土地勘もまったくないし、ジョギングがてらに散策しよう」

そういってティアを、身につけて外へ行くことにした。これからはなるべく早朝に走りこみと軽い筋トレ、木刀の素振り、体術の型の練習などを基礎修練としてやっていこう。

そして基礎修練や、勉強もしっつと子供らしくないことをしながら、日付は経過して行った。そしてとある日、街中をジョギングしていると、女の子の泣く声が聞こえてくる。

「これは、もしかしなくても、なのはだよなぁ……他に、気配がないところを見ると、士郎さんは入院中なのかなぁ……ここは関わらなくても問題はないけども……後々のためにも、最初から行こう」

独り言のように小さく呟き、そう決意して声の主のところへ歩いていった。

運命は何かの弾みで加速する

予想通りというかなのはが泣いている……この頃のなのはは小さな体に色々抱え込んでいるんだよな……話しが出来るかわからないけど、話しかけてみよう。俺はなのはの近くへ歩いていき話しかける。

「どうしたの？どこか痛いの？大丈夫？」

と声をかけてみる、泣いている理由は心当たりはあるけれど、普通に小さな子もとい今は自分も小さくなってはいるけれど、女の子が泣いてたらほっとけないよな。

「ううん、どこも痛くないの」

泣きながらそう応えてくる、声は少し擦れていたのは一人で結構長い時間泣いていたのだと思う。

「じゃぁ……何かあったの？　僕は御剣紀祐っていうんだけど君は？」

俺はそう尋ねた。ちょっと子供っぽくない尋ね方な気がするけれど、精神年齢が高いのだから仕方がない部分はある。

「高町……高町なのは……お父さんが大怪我して、入院しちゃって……お家のみんなが忙しくて……いい子にしなくちゃ嫌われちゃう……の……」

見た目と精神年齢があってない。この頃から不屈というか、抱え込むようになってるんだなぁ……

「なのはちゃんは強いね……でも、僕だととても真似できなくて……泣きついちゃうかも……」

少し泣きそうな感じを、装いつつ俺はそう話した。

「僕やなのはちゃんは、まだ小さいから……甘えたほうがいいと思うよ？　嫌われたりしないと思う」

「そう……なの……かなぁ……」

まだ泣き続ける。まぁ中々素直に甘えるのも難しいとは思うけれど、なのはがこうやって泣いてる事に今はみんな気がつける余裕は無いはずだし。

「泣いてたら、お母さんやお父さんも悲しくて、泣いちゃうと思うよ？　それに、かわいい顔が台無しだよ？」

かなり恥ずかしいセリフを、言ってみたら、とりあえず泣き止んでくれた。

「うん、わかったなのもう泣かない……の」

泣き止んで、微笑む少女の顔は輝いて見えた。

（うっ、同じ年同じ視点からだと思いたいけど、本当にかわいい。）

自分が、顔真っ赤にしている。いかんいかん、平常心平常心と、気を落ち着かせてか

ら。
「なのはちゃん、良かったら少し遊ぼう」
「うん、なの」
　そうして、少し遊んでいた。やっぱり少し運動が苦手なのか、時々こけそうになってたりはしたけど、とにかく楽しく適当に遊んでいた。そろそろ日が暮れ始め、普通の子供なら帰らないといけない。
「あまり遅くなると駄目だから……そろそろ帰ろうなのはちゃん。心配だから、お家まで着いていくよ」
「うん♪こっちだよ～」
　そういって、駆け出したなのはについて行く。道中予測どおりというか、運動音痴のなのはがこけそうになるのを、支えながら翠屋に到着した。
「ただいま～なの～」
　頼むから、なのはの兄が来ませんように……すると、女の人の声がした。多分これは、桃子さんであると思う。
「なのは～心配したのよ～」
　心配していた様子が、見て取れるようになのはに抱きついてる。
「ごめんなさい」

なのはが謝っている。今ならまだ何もいなかったかのようにそ～っと帰れると思い、抜き足差し足で帰ろうとすると……。

「あら、見かけない子ね？　なのはのお友達？　お名前は？」

桃子さんに気がつかれ、逃げるタイミングを逃した。桃子さんのセンサー恐るべし。

俺は観念して自分の名前を名乗り始める。

「御剣紀祐っていいます。公園で今日一緒に遊んでたんです」

「あらあら、それはありがとうね」

そうお礼を言われる。

「楽しかったので、お礼を言われると困ります」

「まだ小さいのに、しっかりした子ね～」

と頭を撫でられる。精神は大人なのでちょっと複雑だな。

「それでは、僕はこれで」

そう言って帰ろうとしたとき、既に遅くあの人が……

「あら、恭也いたのね。この子新しいなのはのお友達なのよ。御剣紀祐君っていうのよ～まだ小さいのにしっかりしてるのよ」

桃子さん死亡フラグ立てないでください。案の定恭也さんがキレてると心の中で悲鳴をあげる。

「なのはが世話になったようだね……ありがとう、ゆっくりしていくと良いよ。奥に、来てくれるとうれしいんだけど……？」

完全にキレてる。声は普通だけど、顔にもろに出てる。そしてなのはと桃子さんは気がついていない…

…

そして捕まり、引きずられて高町家道場の方へ引きずられていった。

そして、道場の入り口を閉められて木刀が飛んでくる……これは冗談抜きで死んだかな……。

「さぁ、好きなもの使うと良いよ」

一応基礎訓練はしてあるし、死にそうにない攻撃を貰ってばたんきゅ～を狙おう。

そう覚悟して、木刀を拾って構える。

恭也さんが猛然と切りかかってくる、そして恐ろしい太刀筋…普通に木刀でも死ねるレベル

「死ぬー」

必死で恭也の剣筋を木刀で必死にいなしつつ、ひたすら逃げ回る、体力は既に限界で、心臓は悲鳴を上げている……仕留めれないのに業を煮やした、恭也さんが、おもいっきり上段から切り落とす。

それを紙一重で、身体をひねってかわし。
「!?」
恭也さんが驚愕している、本人自体も驚いているが、初めての反撃チャンス！
「せぇーい！」
全力の気合と力を込めて、胴に一撃を叩き込む。
しかし、まだ小さいがゆえに、ぜんぜん効いてないようだったが、攻撃は止めてくれたようだ。
「まさか、一撃貰うとは、思わなかったなぁ……すまなかったなぁ」
とりあえず暴れたおかげ?で、落ち着いた様子で、謝ってくれたけど……生きてるのが奇跡だ。
「あらあら、御剣君大丈夫だった?」
桃子さんが来てくれたけどもだ。もっと早く来て助けてもらいたかった。
「しかし、小さいのによくあれだけ動けたね……何か習ってるのかい?」
恭也さんにそう聞かれて、俺は素直に答え始める。とはいっても魔法に関することは話はしないけど。
「習ってるわけではないですけど……一応走りこみや剣術の真似事の練習くらいはしてます」

俺は適当にそう言って恭也さんの追及を回避した。

「なのはがお世話になったから、これお土産に持って行ってね」

桃子さんからシュークリームを貰った。憧れていた翠屋のシュークリームを手に入れられてかなり嬉しい。

「お世話になりました、また遊びに来ます。なのはちゃんまた遊ぼうね♪」

「うん、またなの～」

そう言って、心の中では、少なくともしばらく恭也さんには、会いたくないと思いつつ、家に帰るのであった。

来るべきに日に向かってやるべき事を

翠屋（高町家）から帰宅して家の玄関を開け家の中に入り食事の支度などをしながら訓練メニューや方法を考える

「ティアまだ時間はあるとはいえ、原作が始まるまでに、魔力をBに、そしていくつか使える魔法を習得したいのだが……あと身体強化系で、リミット解放ってのはできないのだろうか？」

《魔力に関して言えば、筋肉と同じで使って魔力をへらして回復していくしかないのですが……かなり危険な手段を使えば、リミット解放オーヴァードライブは覚えれますが……正直オススメしませんよ？》

「危険な方法ねぇ……思いつくのは、発動に時間がかかるとか、効果が切れたらぶっ倒れる、体力と魔力ともに限界まで消耗する、表面的リスクが少ないので言えば、生命力消費（寿命）ってことかな？ティア」

《そのとおりですが、そのうちの一つによって習得難易度や持続時間も違います。リスクによって効果を、引き上げ難易度を下げるわけですが……》

「一度死んでる身だし、一番物騒な生命力消費でいこうか……」

《!!マスター軽々しく命を扱わないでください。》
「命を軽く扱ってるんじゃないけどもな、ちゃんと理由がある」
《といいますと?》
「一つは、個人行動や仲間を救出、及び逃走援護や不測の事態において、単独でも使用して最悪使えるものであることが、望ましいからだ。言い換えれば、多用はしないというより、できないような効果が望ましい、自分自身のストッパーだな」
　ティアはまだ納得していないらしい。まぁ神に作られたティアから見ても新たな命を貰った俺が命を粗末にしているようにしか見えないだろうな。
《しかしですね、それを仲間の人に知られたら……悲しむかと思いますが?》
「だから誰にも話さない。使用条件は、そういう状況可で俺が発動する。あと、ティアにも俺自身の最後のとき、一矢報いるときお前の判断で発動できるようにもする。これでいいだろう?」
《マスターを守るデバイスである私にそのような……》
「デバイスというが……俺は、意思があろうがなかろうが、仲間や自分の身体の一部だと考えているぞ?」
《わかりました。でも、ぎりぎりまで使用はお控えください》
　そうこう話してるうちに、食事ができて飯を食べている。

「一人で飯も味気ないものだなぁ……なまじ身体が小さいから……余計なのかもしれないな……ティアが実体化できればな……もうちょっと変わるんだろうけど……まぁそれはおいおい考えよう……」

そう呟きながら食べると、ティアもなにか悲しげだった。

それからしばらく日付が進む、その間に時々はなのはと遊びながら修練もし、また遊ぶ約束をして遊びに誘いにいくと……

「君が御剣君かな？」

士郎さんが退院していたらしく、初めてエンカウントしてしまった……。

「初めまして、御剣紀祐です」

心の中ではこぇ～と思いながら挨拶をする

「そんなに、恐がらなくても良いよ。なのはがお世話になっているようだね。なのははちょっとお使いに行ってるから。しばらく待ってるといい。ところで……まだ小さいのに動きといい、恭也の話を聞けば一撃当てたんだって？」

!!忘れかけていたことだけど、しばらく前にそういうことがあった。まさか、これで高町家の戦闘民族スイッチＯＮ。とかにならないよねぇ…と考えていると。

「いやね。そんな小さい子が、わざわざ強くなる必要がないと思ったからだけど。なにか理由があるのかな？って思っただけだよ」

と、言われ魔法の鍛錬は、確かに今は一人でしないとだけど……剣術は、誰かに習うほうが、良いかもしれない。殺される可能性も否定はできないけど……。ここは覚悟決めてだめもとで聞いてみよう。

「士郎さん、良かったら僕、いや俺に剣を教えてもらえないでしょうか？少しでも良いので」

「訳有りのようだね……しかも、かなり人に話せない類の事情かな？　少しは理由を話してもらえるのなら考えるよ？」

「わかりました、お話します、でも誰にも言わないでください」

「では、道場の方へ行こうか。誰も来ないし、都合が良いだろう……」

そして道場へ俺と士郎さんは移動して、道場に入ってお互い正座で向き合って座る。

「で、どういった事情なのかな？」

言葉使いや話すことを考えながら俺は話し始める。

「実は、両親をなくして実際は、僕一人で生活してるんですよ。お金は両親の遺産を、おじさんおばさんに管理してもらって送ってきてもらってるんです。それで一人でも、生き抜ける力や大事なものができたときに、守れる力がほしいんです」

まぁ、おじさん（自分が大人モード）おばさん（女神様怒られるかもしれないけど）これで、一応ごまかすことはできるはず。

「なるほどね、生きる力と守る力か……よほど重い枷をその小さな身体につけているのだね……だったらうちの流派を、そのまま教えるわけに行かないが、稽古はつけてあげよう。ある程度力がつけば、自分でどうにかするだろうしね。普段はどうゆう鍛錬をしてるのかな？」

そう聞かれて、魔法訓練とそれに関係するもの以外を話し始めた。

「……走り込み、筋力トレーニング、格闘練習、素振り……をね道理で……でも、筋トレは、その小さな身体なうちは、あまりしないほうがいい、身体が堅くなるから、他の訓練でも、筋力はついてくるから、柔軟は、したほうがいいよ」

自分が、幼年だということをすっかり忘れていたので、やはり話してみてよかったと思う。士郎さんと話をしてるうちに、なのはが戻ってきたらしく。

「ただいま～なの～」

元気な声が聞こえたので、士郎さんに頭を下げてなのはと遊びに行った。

前世の記憶を夢に見る

「御剣～ぼけてると危ないぞ～」

同僚でもあり親友の一人に声をかけられる、これは転生前しかも死ぬ少し前の記憶だろうな。

「ああ、わかってる俺達の仕事は普通に命の危険があるからな」

作業をしながら答える。相棒の方も同じように作業をしながら話しかけてくる。

「お前そういえば婚約者が戻ってくるんだって？いよいよ結婚か？」

「お前にとっても親友というか……、そもそも取り合った仲だろうに……。まぁ普通はそれで友情なんか終わってしまうのだが……」

「お前なら、あいつを守ってやれるさ。それに……あきらめたわけでもないしな。正確に言えば今は負けているでも来世では負けない」

「おいおい、頭がおかしいとか思われるぞお前はモテるのに」

俺は平凡なのだが……親友のこいつはワイルド系というか、目つきは鋭くシャープな顔立ちの癖して、時々幼いようなというギャップも備える。一昔の格闘系の主人公のような雰囲気なのだ、追記しとくとかなりの筋肉ももっている。

「人をお前の趣味に巻き込んだ張本人に言われても説得力ないんだが」
　かなり怒っている様だまぁそうだろうなぁ、この見た目で俺に負けず劣らずオタクなのだ。
「そろそろ次の作業場所に移動だな」
「了解相棒」
　次の作業は電柱での作業なので冗談抜きで死ねる仕事である。俺も相棒も気を引き締めて、命綱や落下防止金具などを入念にチェックしてから作業するために動き出す。
「どうやら機械の調子が悪い相棒見てきてくれないか？」
　ちなみに親友の名前は蘇芳拳志（スオウケンジ）というのだがそいつに頼んで機械を見てもらう
「こりゃ駄目だな上での操作系が死んでるしかも風が強くなってきた」
「手早く済まそう悪いけど操作よろしく」
「あいよノリ」
　そして夢から覚める。懐かしさと寂しさの入り混じった気持ちで心が満たされたが、直ぐに気持ちを切り替える。
「懐かしい夢だな…」
　そう呟くとティアが話しかけてきた。
《マスターどうしたのですか？》

どうも俺の様子が少しおかしいので心配になったようだ。まぁ話しても問題ないことだし話しておくか。

「前世の夢というか死ぬ少し前の記憶を夢で見たんだよ」

《それは…どういう夢だったのですがよければお話ください》

ティアは少し興味があるのかそう言ってきたので、俺は少し詳しく話すことにした。

「親友と仕事をしてる夢だよ、くわしくは思い出せないがその夢の終わりから少ししして死んでしまったんだろうけどな…まだこっちに慣れてないからだろうけど、思い出してしまうと寂しいものだな…拳志…それに結花(ユウカ)」

前世での親友と婚約者の事を思い出し、再び懐かしさと寂しさの感情が蘇る。

《拳志と結花さんが親友ですか?》

「拳志は親友で結花は婚約者だよ、ちなみにこの三人は親友でもあり恋敵でもあった、俺が死んだ以上ユウのことを守ってくれてるといいが…」

《やけに落ち着いてるとおもったら、マスターには前世ではそういうパートナーがいたのですね》

そうティアは言ったがどことなく機嫌が悪い感じがするが気のせいだろう。まぁ頼られるのがデバイスとしては喜びなのかもしれないから、ケンやユウに対して何かしらの対抗心を燃やしているのかもしれない。とりあえずいい加減食事にの時間になって

るし、朝食を食べよう。

「さて朝食を食べて、修練に励もうか、今日も頼むぞティア」

《了解マスター》

ちなみに家事をする時間や昼間（子供が出歩くには不自然な時間などは大人モードを維持してるようにしている。めんどくさいけどこれも魔力消費するので訓練にはなっている）

最近では、士郎さんや恭也さんとかに稽古をつけてもらっているとはいっても、これは御神流を教えてもらっているのではないので人外な剣術をおぼえているわけではない、流石にアレは子供には習得不可能だし……。しかし全力全開の精神？とかなのはのオハナシなどの精神が少しづつではあるが俺にも芽生えてきてるのは言うまでもない。あれは桃子さんの説教以外にも士郎さんの教えなどからも伝わる物だったらしい。

徐々に時は流れていく。修練をしながら運命の日がくるまでにできうる準備をすべく、俺は色々な手続きや鍛錬メニューなども考えていた。

幼年期の修行

　士郎さんに剣術を教わることになってその初日
「今日から、よろしくお願いします先生」
　まずは挨拶をした。教わる者は礼節をわきまえないといけない、武術の基本だ。
「今日から頑張ばって行こうか……。まず尋ねることがあるけれど……御剣君は剣と言ってもどれを使うつもりなんだい？」
　士郎さんに聞かれて俺は直ぐに答える。
「一般的な西洋剣の片手の長剣ですね、木刀の長さだと普通の木刀くらいでしょうか……」
「そうだな、それぐらいになるだろう……じゃぁまずこれを持って、素振り２００本いこうか……」
　そう言って木刀を渡してくれた。普通の木刀より重い奴なので少し扱いにくそうだ。
「まず、中段の構えで普通に、真っ直ぐ切り落とす感じで振るといい……始め！」
　一心不乱に素振りする。普段使ってる物より重いので中々上手くいかない。
「せぃ！はぁ！せぃ！はぁ！」

一振り一振り気合を入れて振り続けて、２００本終わるまで続けて２００本が終わる。

「はぁ、はぁ、はぁ……２００本終わりました」

俺は肩で息をしてかなり疲れが出ている。しかし間髪いれずに次の練習を開始するらしく、士郎さんが指示を出してくる。

「よし！次は下段に構えて……中段をなぎ払う素振りを２００本！」

最初の素振りと、同じように気合を込めて振り続ける。自己鍛錬してるときはここまで激しくしないので自分のやり方が甘かった事が自覚できる。

「それが終わったら次は今の素振りの２連の素振りを１００本！」

よくある十字切りの動作で１００本素振りをする、途中で息が荒くなってきて、動作に切れがなくなってきている。

「切れがなくなってきてるよ、しっかり振る！」

「はい！」

士郎さんに指摘され、気合を入れなおし続ける。

「よし、素振りは終わり！次は、速さを鍛えるために反復飛びをやろう。とりあえず往復５０本！」

少し息を整えてから始めた。走りこみをしているのでこれには少し自信があったけ

ど、まだまだ甘いらしく士郎さんから指摘を受けた。
「もっと早く！実際に攻撃されたとき、君の長所は身体が小さいところだ！素早く動いてチャンスを狙う！そのために、少しでも早く！」
そう言われ必死に飛び続ける。言ってることも正しいので必死になって飛び続けて、終わる頃には足が震えていた。
「よし！反復は終わり！少し休憩を挟んでから……歩法を練習しよう」
基礎修練で自分でも、同じようなことはしてたけど、一人でやると、甘えが出るからやはり人に見てもらうのは効果があるなぁ……そして、呼吸が整ったので、再び開始する。
「歩法といってもさっきの反復の発展系の練習だけど……道場の壁に向かって……反復飛びで行くように、右斜め、左斜めを交互にして、端まで行ったら1本。これを休憩しながらでもいいから３００本やろう、それで今日の訓練は終わりだ、気合入れて行ってみよう！始め！」
そして、歩法というより格闘ゲームでいえばステップの練習だ。これは確かに必須だ、空戦でも応用できるからためになる。そして３００本が終わって。
「ありがとうございました」
士郎さんに礼をして、今日の士郎さんの稽古は終了した。

「頑張ったね、お疲れ様。ちゃんとダウンをきっちりしてから帰るんだよ」
士郎さんはそう優しく言って、家に戻っていった。
そして、今度は結界を張って魔法の練習をするため人気の無い公園で。
「封鎖結界範囲公園全域……発動！」
封鎖結界を発動した。
「ティア、セットアップ！」
《了解マスター。》
バリアジャケットを展開した。
「まずは、魔力弾の発動できるだけ発動させてみるか……」
剣を両手で持ち、上段に構え剣は真っ直ぐ水平に構え、意識を集中する、すると……
普通の大きさの弾が3つ、半分くらいの大きさが1こ出てきた。
「くぅ……現状3，5個が限界……か……ティア、何か的になるもの出せないか？」
《出せますよ～とりあえず4つ出しますね。最初は動かない的で、当てる練習しましょう》
そう言って空中に、不規則に並べらた的が出現した。
《最初1発づつ打って狙ってみましょう》
「あぁ……ソードショット……シュート！」

1発づつ撃ってみたが、全弾外れる。
「くそぅ……もう一回行くぞ！」
それを10回ほどこなして、やっと1発当たるようになった。
「はぁ、はぁ、はぁ……やっと一発か……」
《マスター魔力弾の維持に意識をもっていき過ぎてます。そこに注意すれば、当たるようになるはずです》
「わかったティア、やってみる」
そして、同時に展開するのではなく時間差で展開して、狙いを定める。
「……シュート！」
今度は3つ命中した。
《その調子です、全弾命中が5連続できれば、次の魔法の練習をしましょう》
それから、しばらく続けて、結局あれから40本ほどこなしたその間に一つ覚えで練習した、おかげで、魔力弾が5こ安定して出せるようになった。
《次は炎熱変換の練習をしましょう。これは剣に意識を集中して、炎を纏わせるイメージを、強くして下さい》
そう言われ剣を真っ直ぐ垂直に持ち、目をつぶって意識を集中させる。
（精神集中……熱き炎よ、剣に宿れ！）

剣先の方に小さな炎が出たところですぐに消えてしまった。
「はぁ、はぁ、はぁ、結構イメージの維持が難しいな」
《最初は、火すら出なかったんですから、進歩してますよ、続けてください》
ティアに励まされしばらく練習を続ける。
すると瞬間にはできないが一応剣全体に炎纏わせることができた。
《そのまま5分間維持してください》
時々火の勢いが強くなったり、弱くなったりして時には消えそうになりかかるが、何とか維持できた。
《実戦で、使うのはしばらくは、無理ですけど。今のところは上出来ですよ》
「そうだな……継続すれば使えるようになるはずだよな……」
《次は召還魔法の基礎を練習しましょう。必然的に空間系や転移系の魔法の練習にもなります。まずは……そこの木に宿る精霊を呼び出して見ましょうか……微弱な精霊ですから呼び出すだけなら可能なはずです。》
そう言われて、心を静かに落ち着かせ、木に手を触れて、声を聞こうとする……
［俺の声が聞こえますか木の精霊さん……］
わずかに何かきこえるが、まだ聞き取れるほどの声が聞こえない。
《マスター、もっと心を落ち着かせてください、水のように穏やかに》

さらに、心を落ち着かせると自分の足元に魔方陣が現れる。
［私を呼んだのは貴方ですか？精霊の声が聞ける者なんて何百年ぶりかしら？］
精霊？の声が聞こえるのと同時に魔方陣から精霊が現れた。
「初めまして、御剣紀祐です。召還魔法の練習のために呼び出してすみません」
［いいのですよ、人と会話ができるのが珍しくて嬉しいものですから……でも私と契約しても、特になにもできるわけじゃありませんけど、時々こうやってお話してください。そうしてくれれば練習の協力しますよ、下級でも精霊ですからね］
「ありがとうございます。今日はこの辺でお別れですけど、ここに練習しに来ますから、そのときはお願いします」
［待ってるわよ］
そう言って精霊さんは戻った。
「ふぅ～流石に限界かな魔力……」
《そうですね……これ以上は今は無理でしょうね……今日のところは、これで終わりましょうか》
「了解。ご苦労様ティア教官」
《マスターこそお疲れ様でした》
そして、家に帰り次の日に向かって眠りに着いた。基本これらを、毎日内容を少しづ

つ変えながら、繰り返している

幼年期の不思議体験？

魔法と剣術の稽古は少しづつ確実に進み、体術の練習も自己流でも少しづつ形になり始め、そろそろ気功系の練習もしようと思い、山の森の奥深くで練習をしている。

「はぁぁぁぁぁぁ」

気合を込めて、魔力と違う内なる力を練り上げる。それを手に集め放つイメージで掌底を打ち込んだ。

「気功掌！」

気合を込めたまま技を繰り出すも、小さな気弾が少し飛んだだけだった。まぁいきなり使えるとは思っていなかったが、むしろ形にはなってるだけマシといえる。俺はそのまましばらく気孔掌の練習をする少しづつではあるが放つ気の量が大きくなっていく。感覚がつかめたので次のステップに進む。

「拳掌発勁（けんしょうはっけい）！」

気孔掌の気を練る技法の応用技を試す。体の内で気を練り上げ爆発させるよなイメージをして臨界に達したと思うタイミングで拳を突き出すが何も起こらない、気自体は練り上げるのには成功はしているが爆発させた気を開放する過程がうまくいかない

感じだった。
「うまくいかないか……どうしようかな……」
《マスター素手では無理なのでしたら何かほかのもの持ってみては?》
　ティアは気孔についてはまったくわからないなりにも色々考えてくれてサポートしてくれる。今のティアの提案で俺は考えるところがあって、剣術の練習用の重めの木刀を近くにおいてあったのを手に持って軽く感触を慣らすかのように数回空を切ってから、気を練り上げ先ほどと同じように気を練り上げる。
「剣掌発勁（けんしょうはっけい）！」
　今度は臨界に達したとき木刀で一閃。すると不可視の気の衝撃破が放たれるのを感じだ、まだ本格的な実践に使えるような代物でないけど放てた。気孔と剣術と併用が可能なのがわかったのはかなりでかい、魔力を使えない状況下はそうそうなくても使えるに越したことはない。
「ふぅ……しかし人気がないところでやらないといけない訓練とはいえ深く森の中にはいりすぎたかな?」
《結界を張ればどこでも人知れずに訓練できるはずですが?》
　ティアがいうのはもっともだろうけど、魔法を使いながら気を練るなんてのは今の段階では無理だ、内なる力という意味では魔法も気も同じだが、まったくの別のプロセス

で発動するものだ。
「ティアがいうのもわかるけどな、魔法をつかってると気をうまく感じ取れないんだ。煮た力ではあっても別のものだから」
《そういう物なのですか……。かなり近くに異質な反応がありますよ？人でも動物でもなくなにかのエネルギーのような反応です》
「たしか……うわさではこのあたりに幽霊とか出てくるとかうわさでは聞いたけど……まさかな」
俺はそうつぶやき、木刀を構え周囲を警戒していると、背筋に嫌な悪寒を感じた。空間の一部が揺らぐようなそして悪意の意思を感じる、実体がないエネルギーの塊のようなものが確かに存在している。
「まさか……幽霊？　うわぁぁぁぁ」
俺は全力で背を向けその場から逃げるように走り出す。日が傾き始め元々暗い森の中で足元も悪く何度もこけながら走り続ける、幽霊も残念ながら追ってきてるのか後ろから嫌な気配が少しづつだけど確実に俺を追い詰める。こうなったら幽霊と戦うしかない。
「くそう……幽霊相手に戦うことになるなんて、しかも霊能力なんか持ち合わせていない、通じる可能性があるのは気孔術系だけ」

俺は通じるかもわからない相手に恐れながらも木刀を構えて幽霊に対峙しようとした。そして幽霊の方に向き合い嫌な感じを自身に渇を入れて恐怖を拭いさって戦おうとした。しかし幽霊の後ろのほうから人が走ってくるような音が聞こえる。その音が大分近くになり遠目だけど巫女服を着た女性と小さな狐の姿が目に映った。

「大変!?　誰かが襲われてる!　久遠!」

「くぅーん」

巫女さんが狐の名前を言うと、狐がそれに答えるように吼えると狐の姿から変化して人型になった、

少女が巫女服に身を包んで狐の耳があるから多分尻尾もありそうだ。

「久遠!襲われてる人を守るように気をつけて」

「うん……任せ……て」

久遠と呼ばれた狐は巫女さんにそう答え幽霊に向かって雷を飛ばした。異能系の雷使いを思わせるよな攻撃で幽霊を攻撃して幽霊の動きを鈍らせた。雷が届くのなら気も通るかもしれない。俺はそう思って雷で動きが止まってるところを狙って、放つ気を練るべく意識を集中して練り上げた気を解き放つ。

「剣掌発勁（けんしょうはっけい）!」

俺は練り上げた気を木刀纏わせて閃かせ練り上げた気を幽霊めがけて放ち命中。霊

力ではないから効果的とまではいかないもののダメージを与えられたらしい。そこに巫女さんが小刀をいつの間にか手に持って構えて意識を集中させていたらしく、小刀に不思議な力の纏わせている。

「神咲一灯流《かんざきいっとうりゅう》……真威桜月刀（しんいおうげつは）！」

巫女さんはそう叫んで幽霊を切りつけ、幽霊の気配が霧散した。巫女さんはどこか悲しい表情をしたまま小刀をしまい、俺のほうを向いた。そして気がついたら久遠と呼ばれた狐も元の姿に戻っていた。

「助けてくれてありがとうございます」

偶然かもしれないけど、助けてもらったことには違いがないので素直な気持ちで俺はお礼を言って頭を下げた。すると巫女さんは少しおどおどしながら。

「そ、そんな……お礼なんていわれるようなことしてませんから。寧ろごめんなさい危険な目にあわせてしまって、本当ならもっと早く私達が除霊するはずだったんですけど……って、あなたみたいな小さな子がどうしてこんな危ないところに？」

あ、そうだったこれは困った……。まぁ木刀があるから剣術の稽古で通じるといいけど。

「剣術の稽古です。古流剣術の流れの流派なので人目のつかないところでしか練習できなくて……流派名はすみませんけど話せないのですけど」

まぁでっち上げの嘘ではあるけど人目に付かないところでしかできない鍛錬って部分は、嘘を言ってはいないので通じてほしい。
「……そうですか……私も古流の流れの者なのでわかりますけど……。危ないから気をつけましょうね?」
うまく伝わってくれたのと、心配してくれるのは嬉しい。この人は優しい人だな。
「ありがとうございます。僕の名前は御剣紀祐って言います、もしまたどこかでお会いしたらそのときはお願いします」
「あ、いけない私も名乗らないと神咲那美です。この子は久遠って言うの、さっきのを見ればわかるでしょうけれど妖狐なの……この事は誰にも言わないでもらえると嬉しいな」
「話したところで信じてもらえないから話しませんよ。助けてくれてありがとうございました僕はそろそろ帰ります」
「気をつけて帰ってね。久遠お仕事の続きに戻りましょう」
「くぅ～ん」
そこでお別れして俺は自分の家に向かって歩き出した。少しづつ確実に日が進んでいく、原作が始まる日が確実に進んでいるからだ。残された時間でできうる限りの力を鍛えないといけない。

無印開始

無印主人公設定

名前　御剣紀祐　みつるぎのりまさ
デバイス名　精霊の涙　エレメントティア
愛称　ティア
待機状態　シルバークロスでインテリジェントデバイス女性型
使用系統　オリジナル（魔方陣はミッド）
総魔力　C～B＋
潜在魔力　EX
レアスキル　無形夢想（一度食らった魔法や技や見たものや教わった魔法を修練によって習得可能無論
全てではない、いわゆる飲み込みが極端に早くなる）
オーヴァードライブ（いわゆるリミット解放持続時間短時間身体強化系の究極系？生命力もとい寿命を削り、潜在魔力全てを解放状態にする。簡単に言えば総魔力をEXになり使用可能状態にする）

魔法資質　炎熱変換　風変換、高速機動系、身体強化、治癒魔法
戦闘スタイル　空戦剣士型近距離＆中距離
習得技能および魔法　ウイングエアー（高速機動系魔法で風の資質使用）　スラッシュショット（射撃系魔法誘導弾系と通常射撃の２種）　クロススラッシュ（二連斬の十字斬）　フレアザンバー（炎熱変換のバリアブレイク付与の斬撃）ストレングアシスト（筋力強化の身体強化自己強化と他者にも使用可能）　コンセントレーション（集中力強化＆魔力強化の自己強化と他者に使用可能）　ヒーリング（回復魔法初級）　ブーストヒール（増幅バージョンの回復魔法）
今作主人公、かな～り強い能力を持ってはいるが、最初から、最強ブレイカーは嫌なため。コツコツ修練していこうとする、マイペースな主人公。性格は、温厚真面目？見た目は平凡な黒髪で、少し長め、黒目、原作知識もそれなりにあるため。積極的に介入していくが、割りと臆病である。女神から転生してもらって、能力以外にも、色々引き継いでいる。かな～り卑怯？な境遇で、転生している。転生前の趣味は、アニメやゲームである。

ユーノ君登場運命は動き出す

時は流れ、原作が始まる運命の日になる、基本的な流れは原作でわかることが起こり、なのはと仲がよかったのでアリサやすずかともそれなりに仲良くなっている。そして原作開始の合図となるユーノの念話が届いた。

（助けて……）

これは……いよいよ始まるのか……ありきたりな言葉で言えば、運命は動き出すといったとこか……現在なのは、アリサ、すずかの４人で下校途中

「ふぇ、なにか声が聞こえるみんな聞こえなかった？」

「何も聞こえなかったけど？どうかしたのなのは（ちゃん）」

二人はそう答える

「気のせいじゃないのか？なのはちゃん」

俺は聞こえてるが、この場面で介入すると流れがこじれるので、惚ける。そして近くで、ガサガサって物音がする、そこにはユーノこと、フェレットがいた。そしてなのはがそっと手を出して捕まえる。

「大変！怪我してるみたい！」

「手当てしないとまずそうだな！」
「この近くに動物病院があるはずだから、急いでいきましょう！」
　みんなで動物病院にいって、ユーノの手当てをしてもらい。その後色々話しながら解散となり、その夜
（誰か……僕の声がきこえませんか？）
　ユーノの念話が聞こえたので、飛び起きる。
「ティアいよいよだ！行くぞ！」
「了解マスター！」
　家を飛び出し全力で移動する。激しい物音がしているので、既にジュエルシードが暴走している状態で、今ユーノが逃げ回ってるところなんだろう。様子からして、まだなのはは来ていないらしい。
「ユーノいまは辛いだろうが耐えてくれよ……」
　小さく呟き、なのはがきたらいつでも飛び出せるように身構える。
　なのはが到着したようだ。そしてユーノの発見し、抱きかかえながら走って逃げている。そこに、容赦のない攻撃が放たれて、追い詰められていく……流石に我慢の限界が来て飛び出した。
「大丈夫か！なのは！」

「ふぇ、どうして御剣君がここに？」
　驚愕しているのをよそに。
「危ないから早く離れるんだ！そのフェレットだとおもうけど……俺も昼間から声が聞こえて気になってて、それで夜更かししてたらまた聞こえて……ここにきたわけなんだ！そうだろフェレット!?」
「そうです。僕が助けを呼びました」
　フェレットがしゃべった。なのはも驚いているけど。
「説明は後！今はこの状態をどうにかしよう！」
　そう俺が言いユーノがなのはに向かって話す。
「あなたの力を僕に少し貸してください！」
　なのはは驚いた様子であたふたしている。無理もないいきなりそんなこと言われたら普通は混乱する。
「そ、その、よくわからないけど……」
「君には……資質がある。僕に力を貸してください！」
「資質？」
　なのははよくわからない様子だった。疑問に思うのも無理はないよな……普通の小学生の女の子なんだし。

「僕はあるものを探して、違う世界から来ました！」
　話を続けるユーノ。その話を真剣になのはは聞いている。
「けれど……僕一人じゃどうしようもないかもしれない……だから資質を持った人に、助けを呼んだのです」
「それが私？」
「お礼はします、必ずしますだから……僕の力を……魔法を！」
「魔法？」
　まだ信じ切れていない様子だった。化け物は以前周りの物を壊しながら迫ってくる。これは少々危険だ。
「流石にもうこのままじゃぁ注意を引くのは限界のようだ……仕方ない……ティア行くぞ！」
《了解マスター！》
　なのはとユーノもそのやり取りに、すこし混乱してるようだ。本当なら、なのはに先に変身してもらいたかったけど……最初から介入するつもりだったわけだし致し方ない。
「精霊よ！我に力を！エレメントティア！セットアップ」
　そしてバリアジャケットを展開。ちなみに日ごろの訓練で、予定通りの能力の他に、

切り札と気孔も一応習得している。ユーノとなのはにその姿を見られ。
「あなたも魔導師だったのですか!?」
これはユーノまぁデバイスを持ってるのも気がついてなかったのなら驚くよなぁ。
「御剣君……その姿は……?」
なのははそう呟いた。なのはにとっても変身なんてのは見るのは本屋やアニメなどだけのものだろうしなぁ。
「説明は後！俺はこれの注意を引きながら時間稼ぐから、話をちゃんと聞くんだ！」
俺は、そう言うと同時に化け物に切りかかる！しかし、防がれて距離が少し離れる！
「わかったなの」
なのは達ははそう応え、話の続きに入った。
「ティアそういうわけだから……時間稼ぎするぞ!!」
「マスター上から！」
「わかってる!!」
上からの攻撃を剣で防ぎ、隙があったので反撃に転じる。
「そこ！」
気合を乗せて切りかかる、手応えはあるが、目的はなのはのサポートなので、倒そうとはせずパリィと動きを止めるべく、適度に攻撃を入れるだけである。化け物の動きを

制限して1るうちに、なのは達のほうにも気を配りながら足止めに勤めた。

ーなのは視点ー

「これを」

「これは?」

どうやら宝石（レイジングハート）を渡したようだ。

命があるような、強い輝きをなのはの手の中で、宝石が輝いている。

「……あなたを主に選んだ……」

「え?」

「いいですか?これから僕が言うことに続いて言って下さい」

「う、うん」

「いきますよ…我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

私はフェレットさんに言われたとおり続いて言葉を紡ぐ。それはまるで呪文のような言葉。

「契約の下、その力を解き放て」

「契約の下、その力を解き放て」
「風は空に、星は天に」
「風は空に、星は天に」
その呪文を紡ぐたびに私の中にある心臓じゃない何かが激しく脈打つのが分かる。
「そして、不屈の心は…」
「そして、不屈の心は…」
最後の呪文を紡ぐ。鼓動が最大にまで高まる。
「「この胸に!!!」」
なのはの中から激しい魔力の脈動を感じる。
「「この手に魔法を!!!」」
私は腕を上げデバイスを高く翳した。そしてこれから一緒に戦っていく私の相棒の名前を呼んだ。
「レイジングハート…セットアップ!!」
《スタンバイレディ…セットアップ!!》
レイジングハートの声が聞こえて桜色の光が私の体を包み込んだ
「なんて……魔力だ」
ユーノが驚くのも無理はない。なのはの体から溢れ出る魔力の総量は、軽く見積もっ

ても間違いなくＡＡランクを超えている。まさか管理外世界の魔力保持者が滅多にいない、これほどの魔力の持ち主が見つかるとは、思わなかったのだろう。

ユーノにとってはなんとも嬉しい誤算になってるだろう、俺自身エースオブエース、白い魔王とも呼ばれる魔法少女なのはの爆誕を、目の当たりにして感動している。しかし、それが仇となる。

「グォォォォォン」

「しまった!?がはっ」

なのはの様子に気を取られ、注意力がなくなってるところ攻撃され直撃を受ける。致命傷ほど出ないが、これはかなりきいているが……本来の目的を考えると、これだけやれば問題ないだろう。とりあえずまだ意識だけは、飛ばすわけにいかない……必死に耐える。

「フェ、フェレットさん、これ、どうしたらいいの……?」

桜色の光の中から、なのはの声が聞こえてきた。どうすればいいのかわからず戸惑っているようだ。その声にユーノははっと我にかえり、なのはに指示を送るべく念話を飛ばす。

［お、落ちついて、まずはバリアジャケットをイメージするんだ。自分の身を護るための服を。そして君が魔法を使うための武器である杖を。］

「わ、わかった。やってみる」

桜色の光の中で、なのはは己の身を護るための強靭な鎧となる服を、そして自分の相棒に戦う為の武器としての形を与える。

ゴオオオオォォォ!!

光は徐々に収束していきやがて球状になる。そして突如その光の玉が弾けた。四方八方に飛び散った光の玉の残骸は大気に消えていった。そこに現れたのは白を基礎とした服、赤いリボンを付けたコスチュームに身を包み、その左手に先端に半月状の金の輪の中に大きさを増した赤い宝玉の浮かぶ杖を持ったなのはがいた

「……すごい、これが魔法なんだ……」

なのはは自分の姿を凝視する。

初めてやった当人が、一番驚いているのは無理はない……意識はまだ朦朧としているが、なのはの方に向かって化け物が攻撃をしに行く!

「なのは!気をつけろ!そっちに行ったぞ!」

!?ふぇ～」

混乱しているようだがなのはの魔力はすさまじいし、レイジングハートも高性能。おそらくオートプロテクションが発動するはず。

《プロテクション》

なのはの前にプロテクションが展開された、さすがとおもう。
「御剣君大丈夫?」
「なのは俺はしばらく動けそうにないから、後は頼むよ……冴えないヒーローになっちまったけども……」
冗談が言える程度までは回復したというところか……でも初陣のなのはでも余裕でいけたとはいえ……念のために保険をかけよう。
「今の俺ができるのはこれくらいだけど……」
よろめきながら立ち上がり、魔法陣を展開し詠唱に入る。
「白き魔導師に力を!コンセントレーション!」
集中力を引き上げる補助魔法をかける、これで問題はないはず。
「ちょっとしたおまじないをかけといた……任せたよ……」
そう言って地面に座り込む
「御剣君あとは任せて!」
なのははそう答え化け物の正面に立つ
「フェレットさんどうすればいいの?」
[あの化け物はジュエルシードの思念体なんだから元の姿に封印しないと倒せない]

「どうすればいいの？」

［基本的な魔法は、レイジングハートがやってくれるから。でも封印や本格的な魔法は呪文を唱えないといけないんだ心を落ち着かせ集中して自分の呪文を。］

なのははそれを聞き、目も瞑り集中する……そして呪文を唱える。

「リリカルマジカルジュエルシードシリアル２１！封印！」

無事に封印されたのであった。

「御剣君大丈夫？」

心配そうにこちらを見ながら声をかける。

「大した事ないよ。すこし油断しただけ……傷も軽いし……これなら……自分の治癒魔法で何とかなる……」

「癒しの力よ！我が傷を癒せヒーリング！」

自分を治療する。日ごろの魔法の鍛錬の成果がこういうところにもでる。

「御剣君そんなこともできるの!?」

「隠しててごめんなぁ……なのは……それにフェレットついでに呼び捨てにしてごめん」

「それはいいけど……御剣君はどうして魔法が使えるの？」

「それは多分昔……自分の祖先にフェレットみたいに、別の世界からきた人の子孫だか

らだと思うよ?そして見た目は何の変哲もないこの首飾り、いつも同じのつけてるの知ってるだろうから……これが俺のデバイスの精霊の涙（エレメントティア）だよっとなんか騒がしいと思ったら……パトカーが来たようだな……また明日ゆっくり自己紹介や説明かねて話しをしないか?」

「わかったまた明日ね御剣君」

そう言ってなのは達と別れる

ユーノ君と魔法のお話

なのは視点

昨日の夜の事は夢……ううん、現実だと思います。昨日不思議な出会いと、友達の秘密がわかりました。

私は高町なのは小学3年生です。昨日までは、普通の小学生だったけど……昨日の夜のことで、私は魔法少女になりました。昨日助けたフェレットさん、実は別の世界から来たそうです。名前はユーノ君そして、昨日私を助けてくれたお友達御剣君と今日はお話をします。

「う～ん、まだ眠い～」

そう言いながら、ベットから出て朝の身支度をします。リビングに行くと私以外みんな揃ってました。

「おはようなのはいつもかわいいな」

私のお父さん、高町士郎喫茶店翠屋の店長さんです。

「なのはちゃんと顔と手は洗った？」

これは、私のお母さん桃子さん、喫茶店翠屋をお父さんと仲良く経営してます。

後は、兄の恭也お兄ちゃん、姉の美由希お姉ちゃんの４人家族で、私だけ少し浮いてる気がします。朝ご飯も食べたのでそろそろ登校準備です。

「いってきま～す」

元気よく家から出かけます。少し歩くと、お友達のアリサちゃんとす、ずかちゃんと、御剣君がいます。

「みんな～おはよう～」

「おはようなのは」

「おはようなのはちゃん」

「ふぁ～おはようなのはちゃん」

御剣君だけ眠そうです。

御剣視点

本当に眠い昨日のことが一応影響してるのだろうが……。

「朝出かける前に、ＴＶニュースでやってたみたいだけど。昨日のフェレット預けた病院の近くがすごいことになってるらしいんだけど？」

一応関係者で、内容は知ってるのだが……一応話しを振ってみるすると念話で。

［ちょっと御剣くん！？いきなりそれは……］

［どうせ聞かれるのなら今のうちに、話しとくほうがいいと思うけど？］

[後表面的には、学校のときは今の話し方でいこうと思う、いきなり名前の呼び捨てしたらこの二人が不思議がるだろうし]

[別にいいのに……]

とかすかな念話が、聞こえた気がするが気のせいだろう……。

「そうそう、フェレット大丈夫か心配だよね～」

「心配だね……」

アリサとすずかの二人はこう応える。

「えへへ実は……昨日心配になってきて、様子見に行ったらフェレットさん逃げてきてたの、そこを保護して……それと飼い主はいないみたいだから、当分は家にで預かることになったの」

「だったら近々みんなで遊びに行こうぜ」

「「そうしましょう」」

アリサとすずかはそう応えるのだった。

[なのは、今日の昼屋上で話しないか?この様子だと念話は、もう大丈夫そうだしフェレットの話も聞かないとだし、それ以上時間かかるようなら、授業中も念話しながら今日は過ごそう]

[わかった御剣君]

［そういうわけでフェレットよろしく頼むね］
少ししてから念話が届く。
［昨日の人だよね？わかった昼ごろに二人に連絡するよ。］
そして授業を受けている、まぁ転生年齢都合上勉強するふりとノートさえとっとけば楽勝なので卑怯だとはおもうけど、それと一部の男子からはすこ～し視線が痛いんだよなぁ……。なのは達と仲良くしてるからだろうけど……まぁうらやましそうな視線があるだけだから気にしてないけどもそうこうしてるうちに昼になる。
［二人とも聞こえる？］
屋上に移動して周囲には誰もいないので、怪しまれることもない。
［聞こえてるぞ。］
［大丈夫なの。］
［では改めて……僕の名前はユーノ・スクライアといいます。別世界からジュエルシードと呼ばれる、ロストロギアを集めるために来ました。］
［ロストロギア？］
なのはが聞き返す。俺はわかるけど……聴きなれない言葉だもんなぁ……
［遥か昔に滅びた技術で作られた、物凄い力を秘めた物といえばわかりやすいかも知れません。僕の部族は、生涯遺跡発掘をしています、そしてとある遺跡で、ジュエルシー

ドを発掘したのは僕なんです……」

今のところは、知ってる話通りだな……とか考えながら話は続く……

[そして、輸送途中に事故かなにかが原因で、この世界にジュエルシードがばら撒かれてしまったんです……それで責任を感じて、一人で集めていたのですが……昨日のやつとあわせてまだ2こしか回収できていないのです、お願いですお二人の力をお貸しください]

[ユーノ君これからよろしくね]

[了解だユーノ]

[そういえば御剣君のことまだ聞いてないよ?]

[そういえば、そういう約束だったかな……改めて御剣紀祐だ、一応魔導師ではあるけど、デバイスの出所はわからないし、魔法に関する知識もおおよそしか持っていない…わかってることは、今の総魔力はB～B＋ってとこだと思う、一応レアスキルって言えばいいのだろうけど……実は限定的なんだけど予知能力?を持っている、昨日もそれで、わかったんだよね]

嘘も方便……まぁ、あながち間違ってるわけでもないから……こういう方が説得力あるだろう。

[まさか、そんな希少スキル持ちがこの世界にいたなんて……]

[御剣君って実はすごい人?]
二人とも相当驚いているようだ。
[ちなみにだけど、なのはもかなりすごいとおもうぞ?俺のデバイスの簡易判断だと、少なくても総魔力ＡＡＡだってさ、俺には基準わからないけど、ユーノならこの意味がわかると思う]
[僕もびっくりしたんだけどね……]
[そうなの!?]
そう言われてなのはは驚いているようだ。
[そろそろ時間的に授業が始まるなぁ続きは授業聞きながらだな]
[[わかった（の）]]
それで一度中断し教室へ戻った。午後の授業をは何だったかなぁ……。

今後の動きは仲良く相談？

午後の授業が始まる、みんなが授業を受けているのに、俺となのははさぼり？な状態である。

［ジュエルシード集めだけど、できる限り手伝うけども常に一緒に行動は取れないと思うんだ、色々理由があるんだけどね］

［わかった（なの）］

［でも、どうして？］

［答えは単純だけどな俺はいいけどなのはのためなんだけどね……］

［ふぇ私？］

［そそ、他の男子や女子に弄られるようなことがないようにするためにさ］

ついでに言えば、士郎さんや恭也さん達に、誤解されるのも避けるためでもある、あとは言えない事情もあるしな。

［!?］

なんか怒ってる気配が念話でも伝わる…

［とりあえず放課後分担して探そう夜に反応が出た日とかは念話でお互い連絡飛ばし

て対応しよう」
　今日の授業が終わり帰宅途中。
「そういえば、今日は神社でジュエルシードが出るはず…」
　少し考える確かそんなにきついものでもないし俺がいって片付けてこようかな…
「確かこのあたりのはず」
　目的の神社を発見っとしばらく待つと嫌な気配を感知したので二人に連絡する
［なのは、ユーノ聞こえるか?御剣だジュエルシード発見封印するから後で来てくれ］
［［了解!（なの）］］
　すぐに反応が帰ってくる、さてと原作どおり犬が凶暴化してる
「いくぞ、ティアセットアップ」
《了解マスター》
　いつものバリアジャケットを展開し犬?の正面に立つ
「恨みはないけどちょっとごめんな」
　精神集中……ターゲット確認なるべく痛くないように一撃で……狙いを定める
「スラッシュショット!」
　犬?に見事にヒットしてジュエルシードが出現する
「ティア」

《了解マスタージュエルシード確認、封印（シール）します》
［ジュエルシード封印成功被害０ですんだよユーノ、なのは］
念話を送り
［ご苦労様］
二人から同じように労いの念話をもらった、一度合流してなのはにジュエルシードを手渡し
「御剣君、近々お父さんのサッカーチームが試合するんだけど。よかったら一緒に応援に行かない？」
「応援でよければ俺も行くよ。サッカー好きだし」
「じゃぁまたそのときにね」
「わかったなのは。またな……俺は、お使いあるから買い物に行かなきゃだから」
なのは達と別れて買い物しにスーパーへ移動した
そう行ってスーパーに買い物に行くと金髪の美少女があたふたしている…
アレってフェイトだろうなぁ…まぁティアは特別だから俺の魔力は普段一般人だし感知されはしないだろうけどジュエルシードを探してるのかな…心の中でそう思っていると
「えっと…」

ああ、食料を買いに来たのか…ここで知り合っておくほうが、動きやすいかなぁ…そう思い声をかける事にした
「君どうしたの?」
「お買い物…しに来たの…」
そう言って冷凍食品を買っているようだった…
「栄養偏るからそういうのばかり良くないよ?君と同じくらいだけど、少しは僕もご飯作れるんだよ、良かったら今日僕一人だし…ここから近いから、ご飯一緒に食べない?さみしいからさ」
「…いいの?」
かわいいなフェイト…
「うん、じゃぁ僕の名前は御剣紀祐っていうの君は?」
「フェイト…フェイト・テスタロッサ」
「よろしくねフェイトちゃん」
「よろしく御剣」
そういって自分の家に案内して上がってもらう
「……お邪魔します」
「適当に座ってね」

「……わかった」
フェイトに座ってもらい手早く調理を開始する
（久々に子供のままで料理するからめんどくさいなぁ…トマトとパスタと挽き肉とたまねぎとオリーブオイルと…）
世話しなく動く御剣であった

フェイト視点

（知らない人の家に来たのは初めてだけどご飯とか良くわからないからたすかるなぁ）
ということを考えながら回りを見渡す…何もないところだ…私の部屋と同じ…
そうこうしてるうちにこの家の主の御剣という子が食事を作ってる
「できたぞ～味の保障はしかねるけどパスタだよ」
目の前におかれるので食べてみる
「いつも食べてるものよりおいしい」
冷凍食品ばかり食べていたせいで本当においしかった
「住んでる場所とかわかればおじさんに頼んで時々作りに行ってもらおうか？」
「いいの？」

目を輝かせて顔を近づけてみるとその少年が顔を赤くしてこう言った
「毎日は無理かもだろうけどね」
そう言って自分の住んでいる場所（拠点）を教えるフェイトだった
「それじゃぁ、そろそろ帰ります」
「気をつけて帰れよ～」
そうして御剣家を出て行くのであった

御剣パート

「ふぅ～緊張した…」
《自分から踏みに行った地雷だから仕方ないのでは?》
ティアにそう言われるが、そのとおりだと思った。今日は、もう寝よう…思い立ったら即行動眠りに行くのであった